

ウトロ遺跡神社山地点発掘報告

高橋 理

〒066 千歳市東雲町2丁目34 千歳市教育委員会

緒言

本報告は斜里郡斜里町ウトロ地区に所在するウトロ遺跡神社山地点（遺跡番号記載）の発掘調査報告である。発掘調査は1980年と1987年の二度にわたって行なわれた。したがって本来は両方の調査結果を報告すべきものであるが、第一次調査からかなりの年月が経過したこともあり詳細な報告ができかねる状況となっている。よって第一次調査の内容についてはその一部を報告するにとどめ、第二次調査の内容を中心に報告する。

各次の発掘調査の体制および実施期間は以下のとおりである。なお（ ）内の職名はいずれも当時のものである。

第一次発掘調査

調査期間 1980年5月8日～5月9日

調査主体 斜里町立知床博物館

調査担当者・参加者

金盛典夫（斜里町立知床博物館）

村田良介（斜里町教育委員会）

第二次調査

調査期間 1987年8月4日～8月10日

調査主体 石田 肇（札幌医科大学解剖学第二講座）

調査協力 斜里町立知床博物館

調査担当者・参加者

石田 肇（札幌医科大学解剖学第二講座）

高橋 理（東北大学文学研究科国史学）

松田 功（斜里町立知床博物館）

奈良貴史（慶應義塾大学考古学・民族学）

水沢教子（東北大学文学部考古学）

調査にあたり斜里町（町長 船津英雄）、斜里町教育委員会（教育長 田中輝之）には格別のご理解をいただき、さまざまに御支援いただいた。ここに衷心より感謝申し上げる次第である。また第二次調査の際、ご多忙な期間にもかかわらずこころよく宿舎を提供してくださった金盛哲夫氏、さらに遺跡調査にご理解をいただいた地元の方々に記して篤く感謝申し上げます。

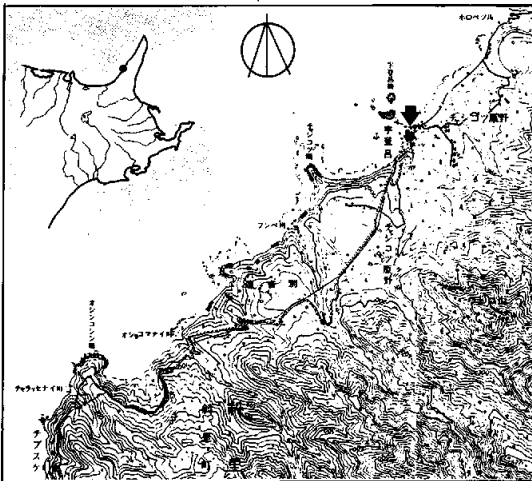


Fig. 1 ユトロ遺跡神社山地点の位置

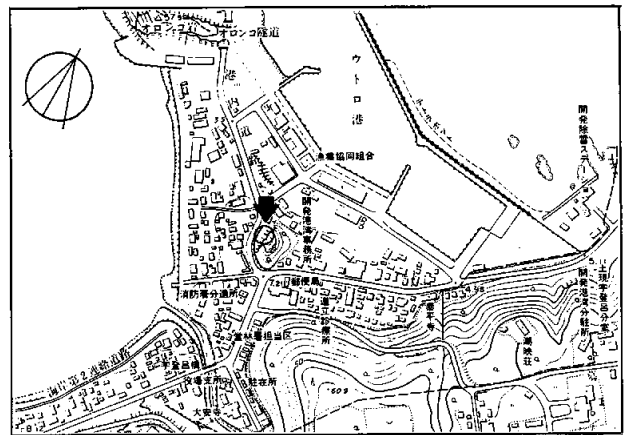


Fig. 2 ユトロ遺跡神社山地点の位置

1. ウトロ遺跡の概要

斜里町から北東へ30km、知床半島のオホーツク海側中央部付近に位置するウトロ地区は漁港として、また観光地として毎年賑わいをみせている。

ウトロ遺跡は河野広道によって、斜里町史（上巻 1955年）の『ウトロ市街地』の項で言及されている（河野 1955）。すなわち「ウトロ市街地の神社付近から病院付近にかけて前北式土器人・後北式土器人及びオホーツク土器人の墳墓群がある。」（32頁）とされている地区であり、さらに『三オホーツク式土器人の墳墓』の項で「ウトロ市街地神社山付近に群在している。墓壙は楕円形を呈し、屈葬体を入れる位の大きさで、深さは30-50cm内外である。副葬品としてはオホーツク式土器・袋柄斧・鉄刀・オホーツク式刀子・石斧・石鎌その他が発見された。墓の上部に1、2個の石を置いてあることもある。」（31頁）と説明されている

地点が本遺跡に相当すると考えられる。（Fig. 1・2）。

現在遺跡は市街地のなかに孤立する標高30mほどの丘陵の西側崖面にかろうじて残っている。直下の町道との比高差はおよそ6mである。遺跡はかつては洞窟内に形成され、その開口部は町道を越えて海岸に迫っていたということであるが、市街化の進行とともに次第に後退し、現在は洞窟の奥壁のみが残っているにすぎない。しかも急崖のため現在も徐々に落下が進んでおり、早急な調査が必要とされている。（Fig. 3、Ph. 1・2）。

包含層は洞窟遺跡ということから、崩落した岩盤が細片化した角礫を主体としている。さらにこの角礫層に間層として木炭が薄く堆積する。第一次調査においては角礫層と木炭層が数枚ずつ互層となっている状況が認められたようであるが、第二次調査においては木炭層は認められず、基本層

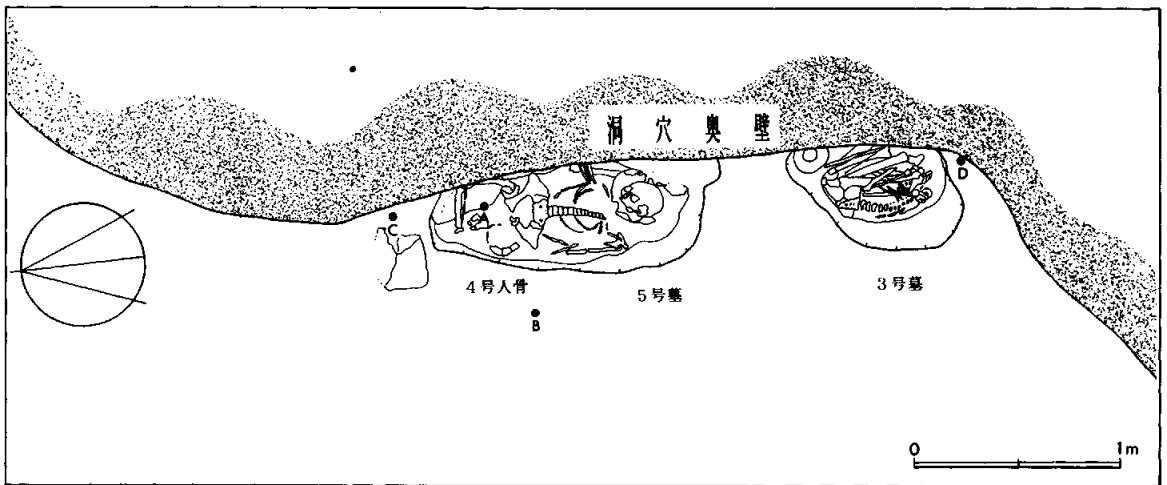


Fig. 3 洞穴奥壁の現状および遺構配置図

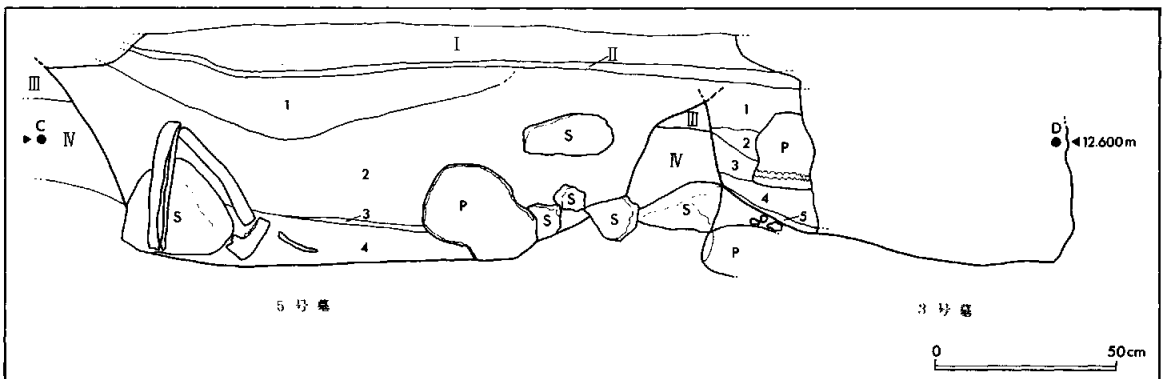


Fig. 4 基本層序・墓壙埋土および墓壙断面図

序は四枚の角礫を主体とする土層（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ層）である。（Fig. 4）。

- Ⅰ層：暗黄灰色土層 小角礫を含む。
- Ⅱ層：淡黄灰色土層 小角礫を多く含む。しまりなく、粘性非常に弱い。火山灰を含む。（Ma-b5か）。
- Ⅲ層：暗黄灰色土層 径2cmまでの小角礫をまじえる。しまり弱く、粘性なし。遺物は検出されていない。
- Ⅳ層：暗褐色土層 小角礫まじりの土層。

2. 調査結果

第一次調査においては3基の墓塚が検出された。第二次調査では第一次調査において頭骨のみを取り上げて終了した3号墓を完掘することから開始、さらに4号人骨および5号墓を検出し、精査して終了した。なお人骨の所見、考察については別論に詳述されている。

1) 3号墓（3号人骨）（Fig. 5、ph. 3・4）

Ⅲ層より検出された。洞窟奥壁南側を一方の壁とし、上面で直径100cm、短径55cmを計る楕円形のプランを呈する墓塚。墳底の深さは確認面から35cmを計る。埋土は5層。

- 1層：黄褐色角礫層。径5cmまでの角礫を主体とする。
- 2層：淡黄褐色土層。径5cmまでの角礫を含む。
- 3層：暗褐色土層。小角礫を多く含む。
- 4層：暗褐色土層（3層よりいくぶん明るい）。径1cmまでの小角礫を多く含む。人骨を

直接埋納する層。

- 5層：暗赤褐色土層。人骨の下から検出された厚さ2cmほどのごく薄い層。墓塚の墳底に敷きつめられた赤色顔料と推定される。

この墓塚は前回の調査においてすでに確認され、頭骨のみ取り上げられていた。今回ほぼ全身の骨格が残存していたことが判明した。埋葬形式は横臥屈葬で、洞窟奥壁を向き大腿骨と脛骨が接するほどの極く強い屈葬である。両腕は胸の前で折り曲げられていた。頭位方向は南。保存状態はきわめて不良であるが、熟年の女性と判断された。副葬品は5号人骨に比較して多い。土器は頭部に被せられた甕形土器を含めて3点（藤本e群）が検出された。また骨角製品は有孔骨製円盤（クックルケン）が1点、尖頭器様の骨角製品が2点、靴篋様の骨角製品が1点副葬されていた。さらに曲手刀子など3点の鉄製品が検出された。

2) 4号人骨（Fig. 6、Ph. 5）

5号人骨の脛骨に隣接して出土した。墓塚等の遺構は確認されなかった。頭蓋冠および顔面頭蓋骨の一部のみであるが、部分的に被熱しているという特異な様相を呈する。熟年の男性と推定された。

3) 5号墓（5号人骨）（Fig. 7、Ph. 6・7）

Ⅲ層中において確認された。確認面において長径135cm、短径60cmの楕円形のプランを呈する。墓塚の確認面からの深さは50cmを計る。埋土は4層。

- 1層：黄褐色土層。径30から50mmの礫を含む。

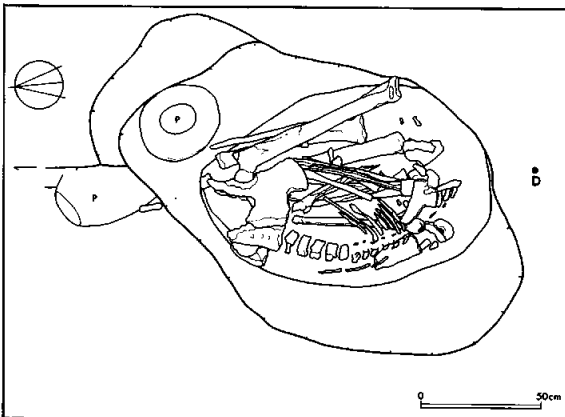


Fig. 5 3号墓および人骨

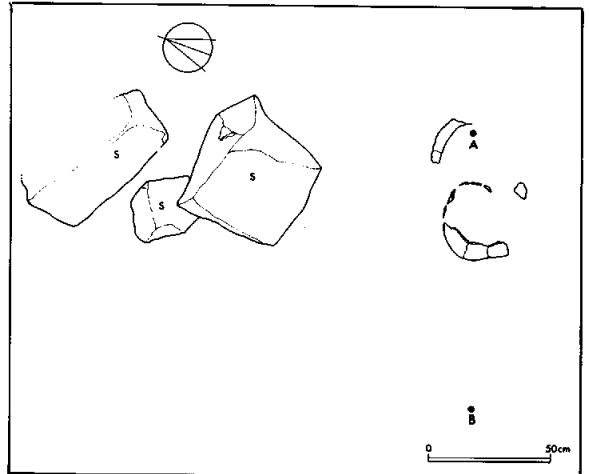


Fig. 6 4号人骨（頭骨）

- 2層：黄灰色土層。小角礫を含む。
- 3層：木炭層。厚さ2cmほどのごく薄い層。
- 4層：黄灰色土層。暗赤褐色土が斑状に混在する。人骨、焼土などを含む層。

頭部はやや大型の甕形土器 (Fig.12) に完全に覆われた状態で出土した。下顎骨のみが右大腿骨近位端付近から遊離して検出された。埋葬状況は上半身をのぼして仰向きに横たわり、右下肢は膝を立てている。仰臥膝立て葬と称すべきであろうか。また左大腿骨以下を完全に欠損している。上肢は右を折り曲げ、左を伸ばしている。保存状態は必ずしも良好とはいえないが、熟年の女性と判断された。頭位方向は真南からやや西に偏りをみせるようである。

副葬品は3号人骨とは対照的に非常に少ない。土器は頭部に被せられた甕形土器が1点 (藤本d群) である。さらに折り曲げられた右上肢の尺骨に接して有孔骨製円盤 (クックルケン) が1点検出されたにすぎない。

3号墓との新旧関係は、いずれもⅢ層中より検出された調査時には確認できなかった。しかし後述するように、副葬された土器は3号墓の3点が藤本e群、5号墓の1点が藤本d群に相当すると判断され、3号墓が5号墓を切って構築されていることが考えられる。

3. 出土土器

1) 1号人骨副葬土器

平底の甕形土器。底部からあまり外反せずに立ち上がり、やや内弯して肩部を形成して、また緩やかに外反して唇にいたる。最大径は口縁部にある。底径18cm、口縁外径40cm、器高42cmを計る。口唇部端面の形状は四角形。舟窩状刻文が口頸部上半に右上がりに1条、肩部直下に水平に2条巡る。口唇直下に縦方向の刻みが1条巡る。色調は黒色。胎土に砂粒が混じる。器面調整はナデ、ミガキ。

舟窩状刻文のみに注目すれば藤本b群からc群に相当しよう。しかし器形が擦文土器のそれに酷似する点が注目される。(Fig. 8)

2) 3号人骨副葬土器

① 3号人骨の頭部に被せられた平底の甕形土器。肩部が強く屈曲して張り出し、頸部は外反して口唇部はやや内弯する。口唇部端面はやや丸みを帯びるか平坦。底径10cm、口縁部外径31.9cm、器高32cm計る。胸部最大径は31.2cm。口唇部直下から4条の波状の粘土紐が貼り付けられ、頸部の上部と下部に2条の平行する粘土紐を貼付し、細かい刻みを加えて擬縄文としている。その間に2条の粘土紐を波状に貼り付ける。さらに2個一対の粘土瘤を4ヶ所に施す。色調は黒色で、炭化物の付着が見られる。胎土に砂粒や小礫が混じる。藤本e群に相当しよう。(Fig. 9)

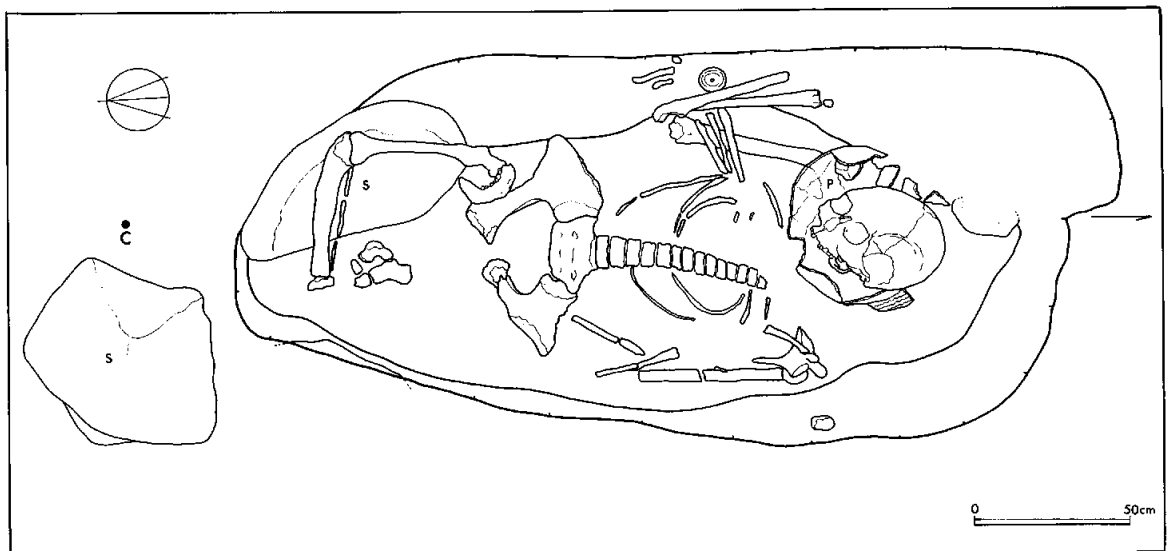


Fig. 7 5号墓および人骨

②平底の小型甕形土器。底部よりゆるやかに立ち上がり、胴部中央で内傾する。頸部直下で「く」の字形に外反する。肥厚する頸部は直立する。底径8cm、胴部外径17.4cm、口縁部外径は14.4cmを計る。胴部に最大径をもつ。口唇部端面はやや丸みをもつか平坦。口縁に2条の平行する粘土紐を貼付し、その間に2条一組の粘土紐を波状に貼りつける。また頸部から胴上半にかけて4条の平行する粘土紐を貼りつけ、下半の3条の粘土紐の間にさらに2条の波状の粘土紐を貼付する。焼成は悪く、色調は黒色。胎土には砂粒、小礫を含む。炭化物の付着がみられる。藤本e群に相当する。

(Fig.11)

③小型平底の土器。直線的に立ち上がり、胴部上半で内側に屈曲して肩部を形成する。そしてふたたび外反して口唇部は内弯する。口唇部端面はやや丸みをもつか平坦。底径約9.0cm、口縁部外径21.2cm、器高17.4cmを計る。最大径は口縁部にある。口唇直下から肩部上半にかけて3条の波状の粘土紐を貼付する。焼成は悪く色調は黒色。胎土に砂粒や小礫が混じる。炭化物の付着がみられる。藤本e群と判断される。(Fig.11)

3) 5号人骨副葬土器

5号人骨頭部に被せられていた平底の甕形土器。底部から直線的に立ち上がり、胴部上半で内弯し頸部は直立する。口唇部端面形状はやや丸みを帯

びる。底径10cm、口縁外径30cm、高さ33.6cmを計る。胴部上半に最大径をもち、33.2cmを計る。口唇は折り返して作出され、肥厚する。その肥厚部に3条の波状の粘土紐を貼付する。頸部には2条平行に粘土紐を貼りつけ、刻みを入れて擬縄文としている。さらにその下に2条の波状の粘土紐を貼付する。最下の粘土紐の下に「八」の字状の粘土瘤が4ヶ所貼付される。

焼成は不良、色調は黒色で部分的に暗褐色。胎土に砂粒、小礫が混じる。炭化物が付着している。藤本d群に相当する。(Fig.12)

4. 副葬された有孔骨製円盤

1) 3号墓出土の有孔骨製円盤 (Ph.9-①)

直径45mm、厚さ8.0mm、重量16.8gを計る。素材は不明。中央に穿孔され、直径6.0mm。一方の面の外縁と内縁に沿って2状ずつ、あわせて4条の非常に精緻な隆起線が浮き彫りされている。他の面に文様はない。3号人骨の頸部付近から出土した。いわゆるクックルケシ(馬場1939、児玉・大場1959、大場1966他)であろう。

2) 5号墓出土の有孔骨製円盤 (Ph.8・10-①)

直系52mm、厚さ4.3~6.0mm、重量12.0gと3号墓例に比してやや大型。素材は海獣骨と考えられる。中央に直径7.0mmの穴が穿たれる。片面に3条の沈線が刻まれ他の面には文様はない。5号人骨の右尺骨中央部付近より検出された。

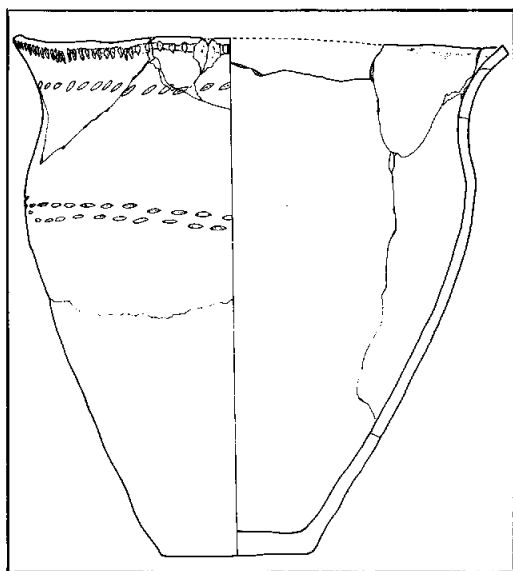


Fig. 8

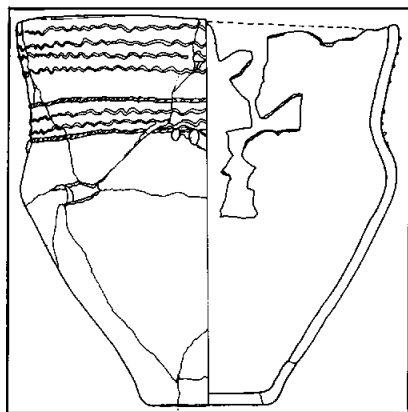


Fig. 9

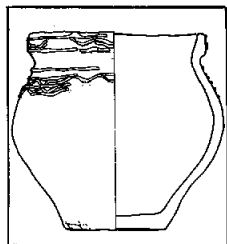


Fig. 10

5. その他の副葬品

3号墓

1) 骨角製品

①擴底より出土した骨精の尖頭器。現存長138mm、最大幅9.3mm。両側縁に刃部が形成され、さらに表裏両面の中央部に稜が作り出されて断面形状はつぶれた菱形となっている。素材は不明。(Ph. 9-②)

②擴底よりやや上位のレベルより出土。長管骨を斜めに切断して尖頭器としている。保存状態は非常に悪い。現存部最大幅8.8mm。素材は不明であるが、鳥骨ではない。(Ph. 9-③)

③号人骨の左寛骨の上に置かれていた骨角器。形状は靴籠様で、全長100mm、現存部最大幅40mmを計る。一方の端部には直径3mmほどの孔が2つ穿たれており、裏面にまで達している。2孔の開口部より長さ40mm、幅3mmほどの隆起帯が延びる。また側縁(おそらく両側縁)は1条の沈線で縁取られている。また2孔ある端部とは反対の端部には内側に向かって3条の細い隆起線が(おそらく半円を描くように)浮き彫りされている。この隆起線は同じく3号墓に副葬されている骨製円盤(クックルケシ)を縁取る隆起線と共通性をもつようである。(Ph. 9-④)

2) 鉄製品

①墓擴覆土より出土した鉄器。現存長72mm、最大幅11.2mm、重量6.8g。一方の端部は緩やかに屈曲しており、曲手刀子の柄部であろう。(Ph. 9-

-⑤)

②墓擴の縁付近と人骨腰部付近より出土した2点が接合した。2点間の距離は約25cm。現存長148mm、最大幅17mm、重量25.9gを計る曲手刀子である。(Ph. 9-⑥)

③3号人骨脊椎骨中央部付近より検出された鉄製品。現存長50.5mm、幅3.5mm、重量0.9g (Ph. 9-⑦)

5号墓

1) 石器 (Fig.13, Ph.10-②)

①凸基有茎の鉄鏃で石質は黒曜石。墓擴覆土中より検出された。

6. 墓擴内および包含層より出土した動物遺存体

3号墓、5号墓より少量ながら動物遺存体が出土している。

1) 3号墓

①種不明鳥骨 上腕骨(r) 遠位端を欠く

2) 5号墓

- ①種不明鳥骨 2層
- ②種不明獣骨 2点 火を受けて黒色化
- ③エゾシカ 頸椎
- ④エゾシカ? 未筋骨?
- ⑤エゾシカ? 4層 脛骨(1)
- ⑥種不明ネズミ類 4層 下顎骨(r)
- ⑦種不明ネズミ類 4層 大腿骨 2点
- ⑧種不明ネズミ類 4層 脛骨 2点

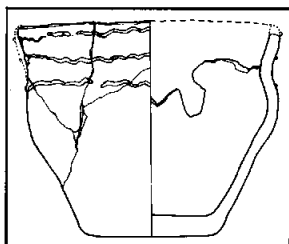


Fig. 11

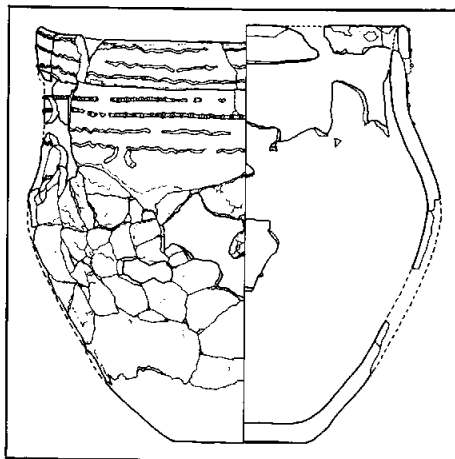


Fig. 12

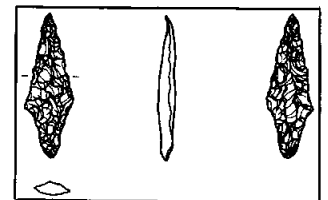


Fig. 13

7. 骨角製品および動物遺存体の保存処理

副葬された有孔骨製品をはじめとする骨角製品や動物遺存体は保存状態がきわめて劣悪であり、何らかの処理が必要とされた。第二次調査時には取り上げ後100%のエタノールに含浸させて保存した。その後千歳市教育委員会の田村俊之氏の御教示にしたがって保存処理を施した。

- 1) 脱水 エタノール100%に含浸 (2日)
- 2) 置換①アセトン40%エタノール溶液に含浸 (6日)
②アセトン60%エタノール溶液に含浸 (5日)
③アセトン80%エタノール溶液に含浸 (3日)
④アセトン100%含浸 (5日)
- 3) 強化 パラロイドー72 20%アセトン溶液に含浸 (7日)

8. まとめ

- 1) 本報告は斜里郡斜里町ウトロ地区に所在するウトロ遺跡神社山地点の発掘調査の成果である。
- 2) 第一次調査は1980年5月8日～5月9日の期間に行なわれた。
- 3) 第一次、第二次調査をとおしてオホーツク文化期に属する4基の墓擴と5体の人骨を検出した。
- 4) 1、2、4号人骨は頭部のみであったが、5号人骨はほぼ全身の骨格が検出された。
- 5) 性別にかなりの偏りがみられる。すなわち4号人骨のみが男性であり、他はすべて女性の人骨と判断された。
- 6) 埋葬方法は頭部に甕型の土器を被せるとい点で一貫していたが、3号人骨は横臥の強い屈葬、5号人骨は仰臥の膝立て葬であった。
- 7) 頭位方向は3号人骨が南、5号人骨が南からやや西に偏る。
- 8) 4号人骨では耳眼水平面から下が火を受けている。
- 9) 副葬された土器は藤本(1966)の分類にしたがえば、1号墓がbあるいはc群、3号墓がe群、5号墓がd群と判断される。
- 10) 副葬品は土器、石器、骨角製品、鉄製品などであるが、墓擴間で多寡がみられる。

- 11) 3号墓の擴底には他の墓擴に伴うと考えられる土器が検出されており、本遺跡にはまだ多くのオホーツク文化期の遺構が残っていると考えられる。遺跡の崩壊が進行していることもありなんらかの措置を講じる必要がある。

終わりに

第二次調査からはや4年の月日が流れた。報告までにこれほどの時間を費やしてしまったのはひとえに筆者の勉強不足と怠惰によるところである。

発掘調査と報告の機会を与え、また常々激励くださった札幌医科大学解剖学第二講座助教授石田肇氏に心より感謝したい。同講座助手大島直行氏には調査にあたり多くの助言をいただき、さらに発掘機材等を提供していただいた。斜里町立知床博物館館長金盛典夫氏には第一次調査の資料を提供していただいた。また斜里埋蔵文化財センターの松田功氏には本報告作成にあたり土器の実測等や筆者との連絡など種々ご協力をいただいた。また千歳市教育委員会主事田村俊之氏には骨角器の保存処理について御教示いただき、薬剤の提供をいただいた。同主事弘田宏良氏には出土遺物について助言を、また必要文献の紹介をしていただいた。松田淳子氏には土器のトレースに御協力いただいた。本報告は以上の御協力をいただいて成ったものである。衷心より感謝したい。

引用・参考文献

- 河野広道(1955年)「斜里町先史時代史」『斜里町史』上巻
- 馬場 修(1939年)「考古学より見たる北千島」人類学・先史学講座第11巻
- 児玉作左衛門・大場利夫(1959年)「所謂クックルケシについて」北方文化研究報告第14輯 pp.115～132
- 大場利夫(1966年)「知床出土の帯飾(クックルケシ)」北海道考古学 第2輯 pp.68～70
- 藤本 強(1965年)「オホーツク文化の葬制について」物質文化6 pp.15～30
- (1966年)「オホーツク土器について」考古学雑誌 第51巻 第4号pp.28～44



Ph. 1 ウトロ遺跡神社山地点の遠景 (矢印)
(オロンコ岩より)



Ph. 4 副葬された土器 (Fig.10)



Ph. 2 遺跡の近景 (町道より)



Ph. 5 4号人骨出土状況



Ph. 3 3号人骨出土状況 (頭骨なし)



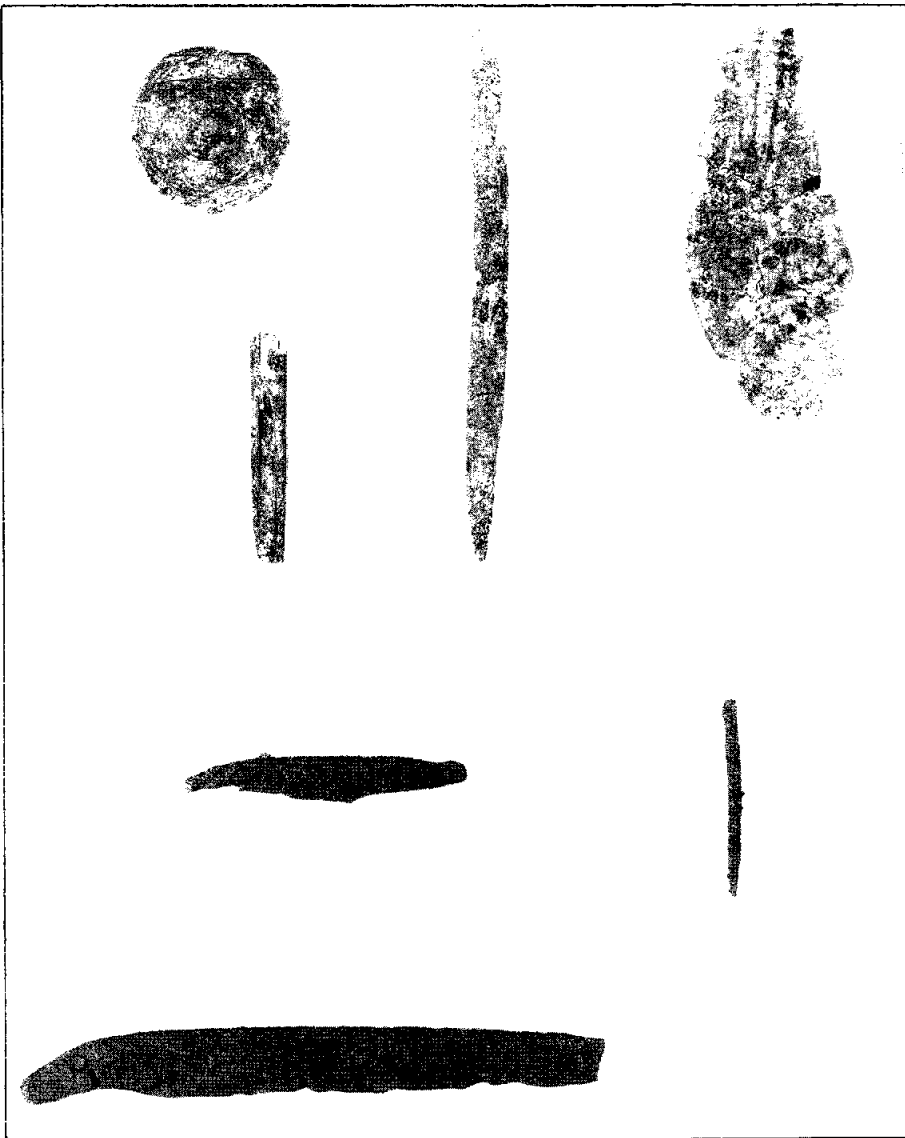
Ph. 6 5号人骨出土状況



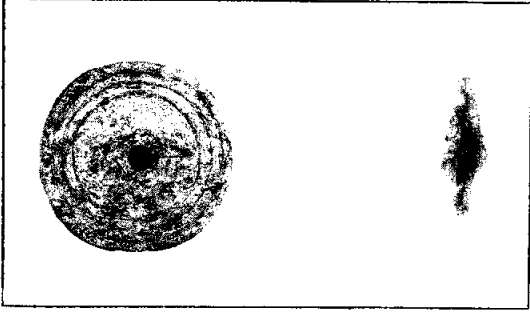
Ph. 7 5号人骨頭部



Ph. 8 副葬された有孔骨製品（クックルケン）



Ph. 9 3号人骨に副葬された遺物



Ph. 10 5号人骨に副葬された遺物

註：Fig 1 は昭和31年地理調査所発行の5万分の1の地形図「宇登呂」、「羅臼」を複製したものである。

Fig. 2 は、北日本測地株式会社による5千分の1の地形図「ウトロ市街図」を複製したものである。